

## 5 - 7 「阿蘇草原再生シンポジウム」開催報告

世界一ともいわれる阿蘇の大カルデラの上に広がる草原景観は、阿蘇くじゅう国立公園最大の魅力要素の一つである。阿蘇の草原は、千年にわたり地域の人々の生業とともに維持されてきたが、生活様式の変化や畜産業の低迷などにより、近年、面積の減少や藪化などの荒廃が進んでおり、これに対し地元の人々や NPO・行政などにより、草原保全・再生の取り組みが始まっている。

このシンポジウムは、国立公園指定 70 周年を機に、あらためて阿蘇の草原の価値を見つめ直し、草原再生に取り組むことの意味を阿蘇の側から下流域、全国へ発信することを目的として開催した。

- ・ 開催日時：平成 17 年 2 月 12 日（土）13：00～16：30
- ・ 開催場所：「熊本テルサ」テルサホール（熊本市水前寺公園 28-51）
- ・ 主催：環境省・熊本日新聞社
- ・ 共催：熊本県
- ・ 後援：農林水産省九州農政局、国土交通省九州地方整備局、阿蘇郡町村会、  
（財）阿蘇地域振興デザインセンター、（財）阿蘇グリーンストック
- ・ 参加者：約 400 名

### プログラム

- 13：00 あいさつ  
環境省自然環境局長 小野寺浩  
（代理：自然環境計画課課長 黒田大三元）  
来賓あいさつ  
衆議院議員 松岡利勝氏  
熊本県副知事 金澤和夫氏  
衆議院議員 坂本哲志氏（メッセージ代読）
- 13：10 国立公園 70 周年記念トーク「阿蘇の魅力を写す」  
長野良市氏 / 写真家
- 13：40 基調講演「自然再生事業と阿蘇草原再生」  
中村太士氏 / 北海道大学大学院教授
- 14：20 阿蘇からの報告 「 - 阿蘇草原再生への取り組み」  
- 環境省九州地区自然保護事務所  
畜産業の取り組み  
- モーモーレディスの会会長 / 草尾幸子氏、狩尾牧場 / 草尾直美氏  
支援・参加の仲介役（財）阿蘇グリーンストックの取り組み  
野焼き支援ボランティア / 舩尾義登氏、末光秀行氏  
草原を舞台に都市・農村交流を進める牧野組合の取り組み  
- 町古閑牧野組合組合長 / 市原啓吉氏  
- 福岡エコ・コミュニケーション専門学校 / 有田良江氏、船迫笑子氏  
\* 休 憩 \*
- 15：00 パネルディスカッション「草原再生から阿蘇の地域づくりへ」  
・ コーディネーター：坂元英俊氏 / （財）阿蘇地域振興デザインセンター事務局長  
・ パネリスト： 高橋佳孝氏 / （独）農業生物系特定産業技術研究機構  
近畿中国四国農業研究センター主任研究官  
井 信行氏 / 畜産業、阿蘇フォーラム委員長  
中村太士氏、長野良市氏  
・ 関係行政機関： 農林水産省、環境省、熊本県

## <講演概要>

国立公園 70 周年記念トーク「阿蘇の魅力を書き」 - 長野良市氏 / 写真家 (南阿蘇村長陽在住)

写真集「阿蘇」、写真集「阿蘇・宇宙」に基づいた 107 枚の写真を映写しながら、地元出身の写真家の目に映る阿蘇、地域に暮らす人々と草原とのつながりなど、阿蘇への思いを語る。

写真を撮る上でひとつのテーマは「峠から見た阿蘇」：地域の人たちは、峠越えて阿蘇を見たとき、素晴らしいところに自分達は生活しているというを確認することができる。

私たちは火山の中に生活をしている：138 キロの外輪山、その中心をなす中岳と私たちは常に一緒に生活をしており、火山活動をしている山との付き合いは切っても切れない。

「幸せの空間としての阿蘇」を撮る - 飛行機の窓から見下ろすと草原の広さ、自分達の位置関係が確認できる。そこに広がる穏やかな空間を見ると「幸せだなあ」という感じを持つ。

阿蘇独特の景観、その変化：輪地切り、野焼き、採草など阿蘇独特の景観だが、最近はカヤ積みもあまり見られなくなり、また、依山峠のススキ野原は最近大きく変化した。野焼き後は、緑色が芽吹き始めて一番綺麗な時期。阿蘇独特な景観が広がるのが確認できる。

映像的な面から草原再生に役立ちたい - 「幸せの空間としての阿蘇」、そういう目で今後も撮っていくことで、草原維持に役立つことができれば、地域に住んでいる者として幸せである。



基調講演「自然再生事業と阿蘇草原再生」 - 中村太士氏 / 北海道大学大学院教授

釧路や北海道のその他の地域、海外の事例をもとに、阿蘇での草原再生の考え方、方向性について専門家の立場から講演。再生事業の主役はそこに住む人々であり、地域の人々が牽引力となってやっていく仕組みづくり、環境と社会・経済とのバランスをとることが重要、などの提言があった。

再生のシンボルについて

- ・ 釧路ではタンチョウが自然再生のひとつのシンボルであるが、阿蘇では景観が大きなシンボル。原風景や特定の種をシンボルとして「それが住めるような地域に住んでいても気持ちがいい」ということが共通認識となるのが、自然再生を進める上で、地域のつながりの中で重要。

自然再生に向けて人間の関わり方 - 受動的、能動的な関わりについて

- ・ 原始的な自然を再生する時、人間は受身 (パッシブ) でいい。人間ができることは自然が蘇る舞台を作ること自然そのものを創ることはできない。阿蘇は人為により維持されてきた自然であり、能動的 (アクティブ) に人間が関わりあうことによる自然再生だと思う。農畜産業など地域の問題と一緒にした形になるほど、自然な形で再生ができるのかと思う。
- ・ 世界では受動的な再生という意味で蛇行復元が多く行われており、デンマークのスカン川の蛇行復元やキシミー川とエパーグレイズという湿原の再生など大規模なプロジェクトが行われている。

阿蘇の草原維持には地域とのつながりが重要

- ・ 釧路湿原は 2 万 ha、湿原の集水域は 25 万 ha 位あり、上流域の生業と整合性を図ってやらないと再生は無理である。一方、阿蘇の草原維持には地域、社会のつながりが重要だろう。複雑な植林



により輪地切りが長くなっている問題も地域の中で整合性を持ってやれば、林業、草地在りも両立することも探っていけるのかと思う。

目標に関する地域の共通認識をもつことが重要

- ・ 目標として生態系をどう考えるかは、同じ風景を共有することが重要。円山川の自然再生では、コウノトリが人間の生活に調和していた時代の1枚の写真を共通認識として、周りの景観もコウノトリが住めるような形でどう整備していくかがひとつのテーマになっている。地域の原風景、そこに戻ることはできないが、近いところに行くにはどうしたらいいかという事を共通の認識として持つことにより「幸せなもの」を地域に生み出すことができるのかと思う。

- ・ 釧路湿原ではNPOとの協働で取り組みを進めている。100人以上で構成される自然再生協議会が立ち上がり、時間はかかるがお互いの合意を探っていく。

「社会的な健全性」、「経済的な健全性」と「生態系の健全性」

- ・ 自然再生事業は「社会的な健全性」と「経済的な健全性」が「生態系の健全性」と一緒に限り絶対上手いいかない。だからこそ地域も一緒になって議論してくれるのであって、そこをどう求めていくのがこの阿蘇の草原再生でも重要なのかと思う。

阿蘇からの報告 - 環境省自然環境局九州地区自然保護事務所

阿蘇の草原の価値、阿蘇の草原の危機、阿蘇の草原環境保全・再生に向けた環境省の取り組みについて紹介したあと、地元の畜産の取り組み、野焼き・輪地切り支援ボランティアの活動、都市・農村交流を進める地元牧野組合の取り組みについて、組合長や参加者の方々との対話形式で報告。最後に、盆花とりのような美しい文化を支えることができる豊かな草原環境、豊かな地域を取り戻したい、とのまとめが行われた。

畜産の取り組み - 草尾幸子氏、草尾直美氏

Q：直美さんが畜産を志したきっかけ、アメリカ研修の印象、牧場での仕事のことなど

- ・ 生まれた時から動物に囲まれた生活で、自然に動物に関わる仕事をしたいと思った。アメリカの畜産は大規模でいろいろな技術があるが、牛一頭一頭に対する愛情が薄いと感じた。仔牛が元気に生まれて育てくれるのが一番嬉しい。仕事で疲れても、阿蘇の景色を見ているとまたエネルギーが湧いてくる。草原再生の話聞いて、この草原は自分たちで守っていかなければと感じた。



Q：幸子さんから、女性の活躍とあか牛のピーアールを

- ・ 牛のお産や育て方について、きめ細やかな配慮ができるのは女性ならではの職業だと思う。あか牛は緑の草原にも雪の野原にもよく映え、ヘルシーで健康にもいいということで皆さんに興味を持って頂いている。地鶏を食べる感覚でぜひ召し上がっていただきたい。

支援・参加の仲介役(財)阿蘇グリーンストックの取り組み

- 野焼き支援ボランティア/舩尾義登氏、末光秀行氏

Q：野焼き支援ボランティアへの参加、活動内容など

- ・ 定年後、新聞紙上で野焼き支援ボランティア募集を知り、研修を受けて6年ほど活動している。阿蘇が好きで、素晴らしい景観を孫やひ孫に残したいという思いがある。地元牧野の方から「ありがとう」と言われると嬉しくなって「また来ます」とい



うことで現在まで継続している。

- ・ ボランティア登録は3~4年前、トータルで40回位参加。輪地切りは刈り払い機や大鎌を持って急傾斜での大変な作業。野焼きでは火消し棒やジェットシューターで延焼しないようにくい止めていく。仕事も年齢も色々だが、きつい作業をやる中で友情が生まれ、作業後の交流が楽しみ。

草原を舞台に都市・農村交流を進める牧野組合の取り組み

- 町古閑牧野組合組合長/市原啓吉氏、福岡エコ/コミュニケーション専門学校/有田良江氏、船迫笑子氏

Q：組合で外部の方を受け入れはじめた経緯、モデルツアーなど受け入れてみての感想は？

- ・ 10年位前から地元の高校の職業体験を受け入れ。牧野離れや高齢化で人手不足の時、組合の維持活動にかかる労力を知ってほしいと思って受け入れた。モデルツアーは台風で痛んだ牧柵の修理が必要な時だったが、皆さんに来て頂いて、修理も無事終わることができ感謝している。

Q：牧野の作業支援ツアーに参加したきっかけ、作業をした感想は？

- ・ 専門学校では自然環境の専攻で、学校の掲示板を見て興味をもち参加することになった。国立公園に興味があったが、阿蘇のことはほとんど知らなかった。
- ・ やったことがない作業だったが、自分なりにこつをつかみ工夫してやれた。異世代の人たちと話をしたり、牛や馬を見ながらの作業は楽しかったし、草原の事を知る良いきっかけになった。



パネルディスカッション - 「草原再生から阿蘇の地域づくりへ」

「草原の再生」をキーワードに、これからの阿蘇のために、草原再生あるいは地域づくりをどう進めていったらいいかという観点から議論。国立公園としての景観保全、草原再生と地域づくり、野草の循環利用などに関する発言とともに、草原利用や支援方策に関する提案がなされた。

<主な発言>

国立公園の景観保全について

- ・ 「景観」は10年~20年、「風景」は百年、「風土」は千年単位といわれ、写真を撮り始めて22年、「景観」としての阿蘇を見ているが、非常に気になるのが西原村に建った風車。阿蘇を広く見ようとした時、中岳の煙に引かれるかたちで風車が回る。美しさや幸せ感は個人差があるが、国立公園のだれもが共有できる場所とかポイントは絶対あるはずだと思う。(長野)
- ・ 「風土」として見た時、後世に遺恨を残さないこと、おかしいと思った時にそれが壊せるシステムがあることが重要ではないか。風力はエネルギー先進国でもわずかなシェアで、バイオマスのシェアのほうが高い。そういうことも学んでいく必要がある。(高橋)
- ・ 本来ある利用すべき形態、それが地域ごとに全体的なコンセンサスを獲得確立されるべきである。その地域に風力発電がほんとに必要なだったのか、そこが一番大切ではないか。(金田)
- ・ 海外のエコツアー関係者は、人工物が見られないこと、草原の中を走る沿道に看板がないことを非常に評価している。私たちが当たり前だと思っている状況が、実はすごく価値がある。(坂元)
- ・ 草原再生するという意味において、北方系植物、大陸系遺存植物がある阿蘇の草原を守っていくために、お金を払わないと入っていけないシステムができないだろうか。(長野)

地域の日常と結びついた再生を

- ・ 釧路の再生事業では、非日常的な時間と空間の中でやっているという印象をずっと持っている。阿

蘇では、入会の問題などあるが、それが逆に求心力となって、再生事業そのものが日常の中に入っていける間口があると感じる。また、希少植物がある場所、畜産業として重要な場所などどんな管理が必要かを、地図上で具体的に議論しながら進めれば地域の人たちも理解しやすくなる。(中村) 都市へのアピールを進め、農業が元気になれば、草原は維持される

- ・ 安全性などの問題から消費者が変わってきた。この様な時こそ草原の大切さをアピールするべき。阿蘇の草原を活用して牛が増えれば草原の草は自然に短くなり、防火帯や野焼きの問題も解決する。草原の草を食べた健康なあか牛を全国の消費者に食べていただければ、草原維持、農家経営の安定につながる。山村・農業に元気が出るのが重要で、都市の方が来て村の現状を知ってもらい、そして声をかけてもらい、農村での生活に誇りを持つ人が増えれば、草原も維持されていく。(井)

草の循環利用の推進を

- ・ 牛を増やす一方で、草の利用により草原が守られるという方式もあっていい。ススキエネルギー作物としてヨーロッパで注目されており、文化財の茅葺き屋根素材が不足して高く売れる時代。草を堆肥やエネルギーとして循環利用することで金を生み出す仕組みを考えたら面白い。(高橋)

地域の人々と草原とのかかわりは薄れている

- ・ 私たち地域住民が具体的に草原維持に参加するのは野焼きの1日しかない。地域の人々が、季節ごとに山に登るプログラムができればいいと思う。(長野)

牧野活用に向けた工夫を

- ・ 牧野を守るうえで、入会権を持つ人たちが責任を持てるシステムが基本にあってほしい。牛は持っていないが草原の草を利用できたり、地域に住む人、農業をやってる人たちが草の恩恵を被るようなシステムなど、牧野それぞれの工夫があってもいいのではないかな。(高橋)

草原が持つ多様な価値を守るためにも国民的な支援が必要

- ・ 中山間地直接支払い制度で牧野の単価は非常に低く、水源保全や希少植物保全、都会の人にすばらしい場所を提供するということには対価が払われないシステムである。野焼きをして管理している人に国民がお金を払うというシステムなども農水省や環境省で考えていただきたい。(高橋)

野草を使った野菜をアピール

- ・ 草原の草を使った堆肥を使った野菜、草原再生シールを貼った野菜もアピールしたい。例えば5キロのトマトを何百人の人が食べたら、草を何百キロ使うから草原がどれだけ維持される、ということで販売するなど、消費者にわかりやすくそれが農家の所得向上につながる方法を考えて進めていく必要がある。(井)

土地利用の検討も必要

- ・ 阿蘇の中で約6割占めている森林は、伐採したあとはまたスビ・ヒノキを植えるのか、草原に戻すのか、そういう話もやっていただきたい。また、熊本の自慢としての阿蘇を、熊本の人たちにもっと認識していただき非常にいい空間である阿蘇を大事に見てもらいたい。(長野)

自分たちの地域をどうしていくかとビジョンが必要

- ・ 阿蘇をどうしていくのかという地域からのニーズが必要。その中で草原を位置付け、その価値を築くことによって、阿蘇の将来を見据えていく。そういったビジョンが必要だと思った。(坂元)



<行政から>

- ・ 阿蘇地域振興局は、景観的な財産である阿蘇を生かし、地域を元気付けていくという役割を担

っている。会場からのご要望については多面的な検討が必要である。林地、草原の両面から検討し、その価値について理解が得られるかたちで整備をしたい。(金田)

- ・ 阿蘇の草地の維持には放牧畜産の再生、経済活動としての持続が大事である。阿蘇のあか牛には「自然」「草」「健康志向」など消費者にアピールできるものがある。様々な連携による地域保全が求められ、農水省として何が出来るか考えていきたい。(引地)
- ・ 地域の農業、畜産業が健全であれば、阿蘇の草原も良好な状態で維持でき、その結果、観光客も増える。阿蘇の自然の魅力は体感することが一番、地域の子供たちや多くの方々に阿蘇に関心を持っていただき、阿蘇草原の取り組みにご参加をいただければ思う。(新井)

<会場からの意見>

- ・ 輪地切りは火災保険会社などから金を取り、輪地切りをする村の人たちに1キロいくらということで払えば続けていけるのではないか。野焼きは大体3月20日と日程がわかっているので、手伝いを無理やり募集しなくても、市内の阿蘇出身者に声をかければ帰れる。これを提案したい。景観のいい地域を指定して、放牧に対する手当をすれば景観が保てると思う。阿蘇の原野が保たれているのは入会権があるから。何があっても入会権を解消してはならない。阿蘇の観光では風景がよく見えることが重要。大観峰など峠道の下のスギの伐採を考えてほしい。(熊本市在住/阿蘇出身者)
- ・ 草原を再生するには畜産が一番。道路沿いに放牧して観光客に楽しんでもらいたいが、道路に牛が出る心配があるため、ミルクロード沿いに擬木などで牧柵を整備してほしい。(阿蘇在住/牧野組合長)

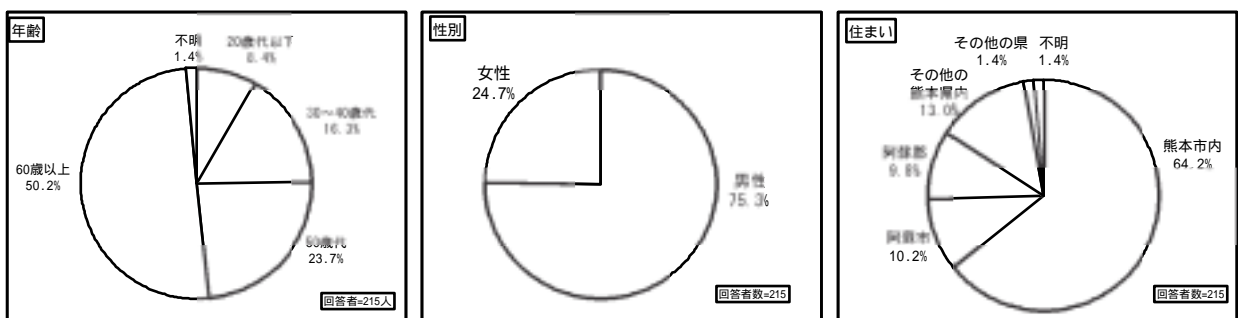
「阿蘇草原再生シンポジウム」に関するアンケート結果

調査の概要

- ・ 調査方法：「阿蘇草原再生シンポジウム」会場（熊本テレサ）にて配布、回収。
- ・ 回収状況：回収数215票

回答者の属性

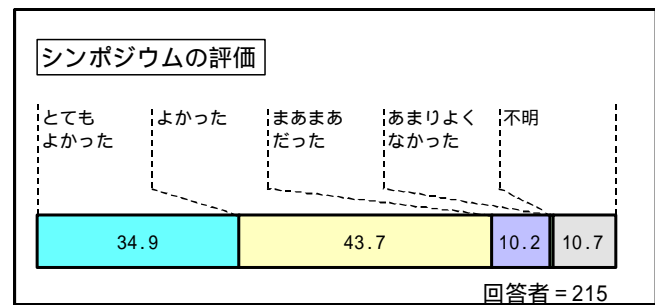
- ・ 年齢：回答者の半数が60歳以上。
- ・ 性別：回答者の7割以上が男性
- ・ 居住地：6割以上が熊本市内。阿蘇市、阿蘇郡は合計2割。



## シンポジウムについて

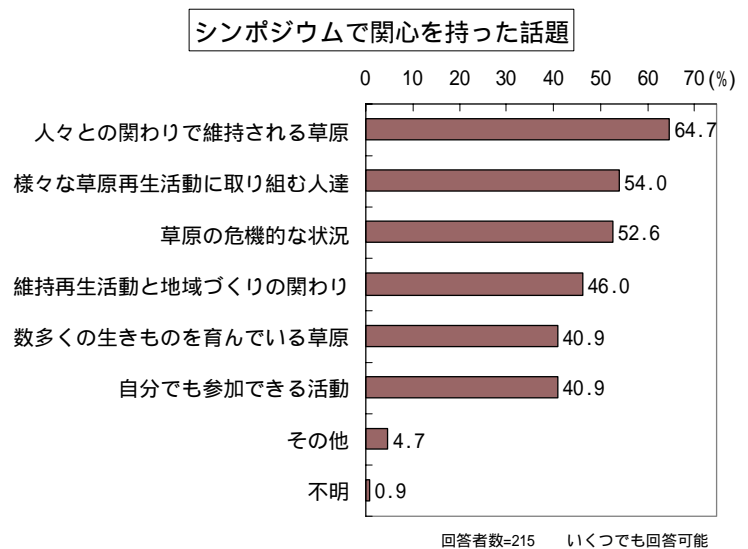
Q1：「シンポジウムは如何でしたか」

- ・「とてもよかった」「よかった」をあわせると約8割。



Q2：「シンポジウムで話題になったことのうち、特にどんな点に関心を持ちましたか」

- ・「阿蘇の自然や風景が、地域の人々の生業との関わりの中で維持されてきたこと」が6割以上で最も多く、次いで「草原を維持し、再生するために様々な人たちが様々な活動を行っていること」「阿蘇の草原がいま危機的な状況にあること」がそれぞれ半数以上。



## 阿蘇の草原再生について

Q3：「あなた自身が阿蘇の草原再生に関わるとしたら、どんなことが出来ると思いますか」

- ・「放牧地で育てたあか牛の肉や野草堆肥で育てた野菜などの産品を積極的に購入する」が約7割。

